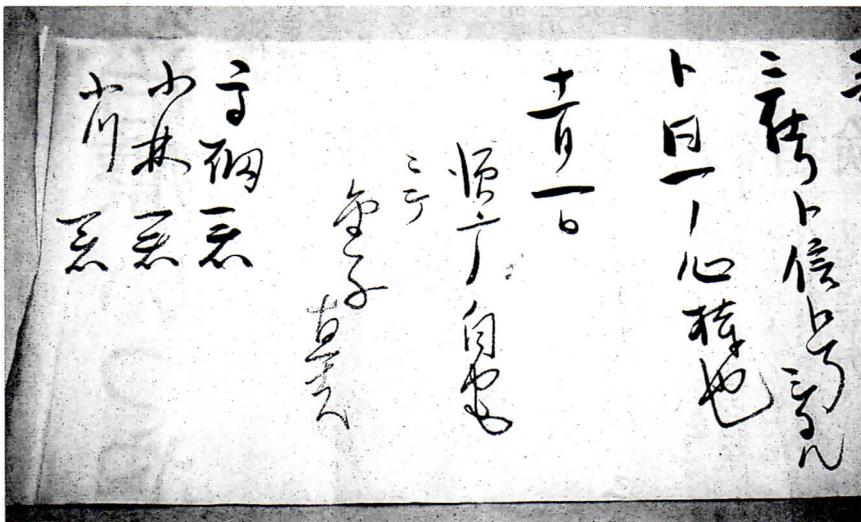


鈴木商店文書 定説年代覆す

両財閥を射程に据えて大番頭金子直吉（1866〜1944年）の発した大号令「天下三分の宣言書」が定説の2年前、1915（大正4）年に書かれたとみられることを、齋藤尚文・兵庫県立芦屋高校教諭（52）が明らかにした。鈴木商店を語る上で欠かせない有名な資料だが、17年に貿易年商首位となった絶頂期と結びつける従来の解釈に、再考を促している。

（田中真治）

「三井、三菱と天下三分」の宣言書



11月1日付の「天下三分の宣言書」。小川実三郎氏が神戸出発の朝、須磨の金子直吉宅を訪れた際にしたためられたという（鈴木商店記念館提供）

■原本は日付のみ

宣言書は、高畑誠一ロンドン支店長らに宛てた長さ6頁を超える巻紙の書簡で、14年開戦の第1次世界大戦を受けて、商品需給の調査などを指示。「此戦乱の変遷を利用して大儲けを為し三井三菱を圧倒する乎、然らざるも彼等と並んで天下を三分する乎、是鈴木商店全員の理想とする所也」と意気込む終盤の文面が名称の由来で、社員士気を高めたとされる。原本には「十一月一日」と日付しか記されていない。

■事業状況と矛盾

齋藤教諭は鈴木商店の台湾での事業展開を研究。船舶事業の調査過程で、宣言書の「帝



齋藤尚文教諭

「宣言書」年代 従来の見解

1917（大正6）年説の根拠▶「金子直吉伝（50年刊）に転載された宣言書は、日付のみに「大正六年」と加筆されている。宣言書所有し、伝記発刊に携わった高畑誠一氏にとみられ、同氏は自伝「私の履歴書」（年連載）でも、同年の着信と記述。桂芳男神戸大教授の「総合商社の源流 鈴木商店（77年刊）、城山三郎氏の小説「鼠」（66刊）などで一般化している。

1916（大正5）年説も▶「松方・金子物語」（年刊）は、浅田長平・神戸製鋼所会長（当時）18年に高畑氏をロンドン支店に訪ねた回想「天下三分の計」を収録。宣言書を託された川実三郎氏のロンドン派遣を16年と記し、書掲載の宣言書の写真説明も同年とする。島高明氏は「大番頭 金子直吉」（2013年）で、開戦3年後の17年執筆では、号令のタイミングが遅すぎると疑問視。浅田氏の回想根拠に16年との見解を示している。

鈴木商店 1874（明治7）年に神戸砂糖商として創業。女主人鈴木よねと頭金子直吉の体制で、樟脳（しょうのう）鉄鋼、製粉などに事業を多角化。1917年に貿易年商15億4千万円に達し、三井物産をのいだとされる。18年に米騒動のあおりで店が焼き打ちに遭い、金融恐慌下の27（昭2）年に破綻。興亡を描いた玉岡かおる氏小説「お家さん」（2007年）は舞台やテレビドラマにもなった。サイト「鈴木商店記念館」がOB会の辰巳会により運営されている。

芦屋高・齋藤教諭が船舶事業から検証

「1915年執筆」年商首位の2年前

国丸は他に売却（明年七月六十五万円にて）せり、続いて報国丸の又売らんとす」という事業方針を示す文面に注目した。

齋藤教諭によると、両船は鈴木商店が設立した南満洲汽船の所有で、帝国丸は16年に売却、報国丸は15年12月に行方不明となったことが当時の船籍資料などから判明。宣言書が定説の17年に書かれたとすれば、つじつまが合わないことが分かった。英米の鉄供給見通しを尋ねる文面からは、英国が16年、米国が17年に鉄の禁輸措置を

取っているため、17年の執筆では矛盾が生じることを確認。宣言書を高畑氏に届けた社員、小川実三郎氏のロンドン赴任が15年だったことも、鈴木商店OB会誌「たつみ」3号への同氏の寄稿から明らかに、15年の執筆と結論づけた。

■事業拡大の時期

鈴木商店は開戦の年の11月、一斉買い出動で巨利を得た。宣言書はその約1年後、「事業拡大へ向かう時期に、三井、三菱との決戦を想定し、ロンドン支店を鼓舞する目的で発した」と齋藤教諭は位置づける。

また「宣言書はドラマチックに捉えられるあまり、文面が検証されてこなかった」と、鈴木商店の学術的研究の遅れを指摘。伝記や回想談の裏付け作業、「たつみ」のデータベース化の必要性などを提起している。

